

JN LearningLab

私の
英語勉強法横山和子 さん
東洋学園大大学院教授

あきらめず、続けることこそ大事



撮影・宮崎真

「目の前にあることを一生懸命やってきただけ。大変な時もあるけど、ぎりぎりまで頑張っていると道が開けてくる」と語る横山和子さん

よこやま・かずこ 1964年、北海道小樽市生まれ。北海道大卒。欧州に本部を置く国連3機関で勤務後、90年に帰国。津田塾大の非常勤キャリア・カウンセラーなどを経て、2016年4月から東洋学園大大学院現代経営研究科長。

人口減少で国内市場の縮小が懸念され、日本企業は成長著しいアジア諸国などで次々に事業を展開しているが、海外で活躍できる人材はどう育成すればいいのか。国際公務員の経験がある横山和子・東洋学園大大学院教授は、海外で既に活躍している日本人の動向に注目し、そこに人材開発のヒントを得ようと研さんを積んでいる。国際公務員も高度な語学力などを求められる職種だが、横山さん自身はどのように備えたのか。

国際学会でも注目された研究

ネパールで昨年9月に開催された国際学会「第16回国際起業家研究フォーラム会議」で、東洋学園大（東京・文京区）の同僚であるセーラ・バーチュリ准教授と共同執筆した論文“Japanese Self-initiated Expatriate Entrepreneurs in Cambodia”（自分の意思に基づき海外で働く日本人起業家の研究——カンボジアの事例から）を発表した。カンボジアで活躍する日本人起業家を引き合いに、日本人の海外進出や海外での起業についての研究成果をまとめたものだ。学会に寄せられた計64本の論文の中から Best Paper（最優秀論文賞）に選ばれた。

国内では終身雇用制が崩壊しつつあり、会社という組織に縛られない生き方を求めて、海外での就職や起業を目指す若者はますます増えていくだろう。そのような若者たちに「新しい働き方を提案する」ためにも、現に海外で活躍している日本人の動向を手がかりに、人材開発の研究が続いている。ただ、殊に国際公務員のこととなると、自身の体験から言えることがいくつもある。

「国際公務員を目指す若者はいつでも一定数いると思うが、横山子女にしかねないのではといった偏見がある」。自身、北海道小樽市の「ごくごく普通のサラリーマン家庭」に生まれ育った。子どもの頃の小樽は貿易が活発で、北欧やロシアから外国船が頻りに来進し、多くの外国人船員が街の目抜き通りを往來していた。1972年の札幌冬季五輪当時は、姉と2人で観戦を見に行き、会場で毛皮のコートを着込んだ外国人の顧客らを目の当たりにした。異文化への興味はそんなところから高まっていった。北海道大に進学してから、ロータリー財団の奨学

金を得て、米インディアナ州立大大学院に留学することになった。それに備え、耳を傾けたのがNHKラジオの「基礎英語」。初歩的な英語を教えてくれる番組で、テキストは使わず、耳から学ぶことに専念した。聞こえてくる生きた英語はオウム返しにし、「英語で答えてみてください」と言われれば、その通りにした。そんな学習を通じて、「英語をちょっとしゃべったり聞いたりするだけなら、中学レベルの文法や語彙で十分」と分かった。

地元紙を読んで英語力を磨く

米国留学は、経営学修士（MBA）を取得することが目的だったが、勉強は想像以上にハードだった。大学図書館は深夜の12時まで開いていたが、講義で使われるテキストのほかにも読まなければならぬ図鑑や辞書などが多く、毎晩閉館の10分前まで勉強した。この頃は、英文読解力を鍛えたくて、地元の新聞もよく読んだ。「米国の新聞は、子どもが読んでも分かるように書かれているので、留学生にはちょうど良かった」。

学位を取得し、日本で就職しようと80年に帰国したが、男女雇用機会均等法はまだなく、希望していたいくつかの企業から、冷たくあしらわれた。「MBAを持っている女性を部下に持ちたい男性はいない」とさえ言われた。

そこで目を向けたのが、政府が国際機関に人材を派遣する「アソシエイト・エキスパート制度」。その試験に合格すると、ジュネーブの国際労働機関（ILO）本部への赴任が決まった。難いたのは、配属部署だった。送られてきた文書には emergency employment scheme branch（緊急雇用対策課）と記され、自分は「緊急に雇用されたのだ」と早とち

りした。実際には、アフリカとアジアでの失業対策事業を担当している部署だった。ウガンダ、タンザニア、バングラデシュなどの現地事務所から送られてくる事業の進捗状況をまとめ、ILOへの提出金を負担している国々への報告書の素案を作成する仕事などを任された。

「日本人はデータを整理するなど非言語的な作業は得意」。しかし、英語で書かれている膨大な資料を読みこなすとなると、それなりの読解力が求められる。自分の「読む力の不足」を痛感した。推理小説が好きだったこともあり、アガサ・クリスティーの作品をほぼ週1冊のペースで読むなどして、英語を読むことに力を入れた。

雑音が雑音でなくなる時が来る

ILOから国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）、本部・ジュネーブ、さらに食糧農業機関（FAO）、本部・ローマへと移り、計9年間の国連機関勤務を経て帰国。日本に戻ってからは、津田塾大のオープンスクールで非常勤のキャリア・カウンセラーとなり、それから約20年、国際公務員志望者を支援した。1996年には、自分の体験などをつづった「国際公務員になるには」（ベリカン社）を出版。「横山先生の本を読んで国際公務員になることを決めました」という学生もいた。

海外で働くことを目指して英語を学習する人々に伝えたいことがある。語学力を伸ばすにはそれなりの時間がかかる、ということだ。

「それでも続けていると、それまで『雑音』でしかなかったものがある日、急に分かるようになってくる。そこまであきらめずに続ける力こそが重要だ」（黒岩竹志）